

吾里夢中

「…こんばんは♪ 待たせちゃったかな？」

その子を見つけたのは、たしか4日か、5日ほど前。

寝ても起きてても夢現（ゆめうつ）で、夢の中で夢から覚めたりするものだから、自分が本当は何処で寝ていて何処で目覚めるべきなのか分からなくなったりする。

その子を見つけたのは通勤途中にある土手で： その日も私は、無意識に帰路を外れて件の土手に座り込み、命の盛衰を眺めながら数時間モヤモヤと覚束ない記憶に手を伸ばし続けていました。

それは追いかけても追いつけず触れることもできない8月の逃げ水や、名前も顔も太陽の火に真っ白に焼かれてしまった愛しい夢の手枕のように、何も掴めないまま曖昧に暇を費やして自宅に帰る。

そんな日々を繰り返していましたが、あの子ももう何処かに居なくなってしまうだろうし、こんな姿を人に見られるわけにはいかないから、今日は『思い出せなければ諦めよう』と決意をポケットに入れてここに来ました。

すると不思議なこともあるもので、中学生頃の自分の姿をした何かが立っています。

「私ね、ミノさんに死んでほしくないんよ……」

それは夕日を背負っていて、未だ手放すことのできない私の淋しさを表情（かお）に浮かべながら手を差し伸べてきました。

肌にとても懐かしい熱を感じて、腑にため込んだ苦しいものが喉元に込み上げます。

戻れるものなら戻りたい。

取り戻せるものなら、たとえ5億年掛かってでも私は……

目の前に立つ私の過去が、一生懸命納得させて諦めさせてきた罪深い私の想いに鞭を打ち、小さなこの心の檻（うなや）で暴れだす。きっとこの子は昼夜の狭間に棲む『後悔』とか『望郷』という名前の魔物の一種なのだど理解しました。

もしかしたら私は、思い出せないほどずっと昔から、この魔物に魅入られていたのかも知れません。だって私がこの土手に足しげく通い眺め続けていたものを思えば、とても善いものには思えないから。

私の姿をした何かが語り続けます。

「……でも、ミノさんがあるとき死んでいなかったら、今ある私もわっしーも在り得なかった。にぼっしーも勇者じゃなかった。満開も精霊バリアも実装されなくて世界は滅んでい

たかもしれない。

私自身のことはともかく、それって、ミノさんの死の否定はわっしーの存在否定でもあるのかなって……………ミノさんや、わかちゃん達の犠牲を糧にして生きている私たちと、このカラスさんの亡骸を食べて生きてる蛆虫さん達の違いって何だろう？って…」

カラスの死骸と、その骸に纏わりつき、体表を忙しなく這いまわる分解者たち。

それが私の目を奪い、意識を捉えて離さなかったもの。

私はこの剥き出しの命の営みから目を背けることができませんでした。

初めに感じたのは、失われて動かなくなってしまうという寂しさと、死に対する畏れ。 賤しくも故人を貪る埋葬者たちの姿は、私の目には凄惨で冒瀆的な神聖をも放ち、不浄との逢瀬を重ねるごとに私の心を絡めとる黒い蔓草は増えていく……………今では仕事中でも情景が頭から離れず、いつも心ここに在らずの上の空。

そして気が付くと、いつの間にか私はこの夕焼けの土手に居る。

私はこの子たちを見て何かを思い出しそうになって、思い出せなくて、きつと何かを忘

れていて、何を忘れてしまったのか分からない気持ち悪さに支配されていて…

たしかに私はお家に帰って、ご飯を食べて、起きて、日々のノルマを消化していたはずなのに、その記憶は不確かで……意識がはっきりしているのがここにいる間だけだから、時間や曜日感覚もあまりなくて、ひよっとすると私はこの場所に何年も閉じ込められていて、現実だと思っていた世界は無意識に逃避した夢幻（ゆめまぼろし）で、本当の世界はとっくに滅んでしまっているのかもしれない。

……私が最後に人と言葉を交わしたのはいつ？

私が最後に朝日を浴びたのは？

私が初めてここに来たのはいつのこと？

そもそも私はどうやってここに？

ここは讚州市のどこ……？

今まで当たり前に受け入れていたことが急に気になり始め、途端にこの場所のすべてが見知らぬ何かに表情を変える。

虚実が混ざり合い、始まりと終わりを隔てるものが消え失せ、私は乃木園子を見失い、私という存在は一と〇の狭間で迷う曖昧な何かに還元される。本来自己と不可分なはずの過去と世界を失ってしまったなら、それは、もう乃木園子を乃木園子と定義し続けることができなない。私は今、勇者でも乃木園子でもないただの私になった。

莊子は夢に胡蝶となるか、胡蝶が夢に莊子となるか。じゃあ、莊子としての過去も胡蝶としての過去も不確かな私は、私と呼ぶ以外に何者と言えるの？

記憶はある。

だけどそれは何処までいっても記憶でしかなくて私の過去とは限らない。

勇者に変身してバーテックスなんていう怪物と戦ったり、四国以外のすべてが滅んでいて、怒って現れた神様を返り討ちにしたり、そんな漫画や小説みたいな荒唐無稽（こうとうむけい）な世界が本当に現実……？

それなら宇宙なんてものは初めから存在してなくて、この茜色に染まった空と河と土手だけのこの場所が世界の真実の姿だったとしても何も不思議じゃない。

現に私は私のはずなのに、私の目の前に私が立ってる。

私は誰なの……？

きつと目の前のこの私は、すべての災厄を封じたパンドラの壺。

一度開けてしまえば、この世に災いが満ちると考えていながら、希望という名の僅かばかりの麻薬に憑りつかれて私は手を伸ばす。『この手を取ること、その正体が分かるのなら』と、私は私の確証を求めて逢魔時の魔物に身を委ねてしまう。

「誰かの死が誰かを生かしていて、誰もが生が誰かの命を奪ってる。反対に、わっしーの今を肯定することは、ミノさんの死を肯定することになっちゃうのかな。なんかね。分からなくなっちゃった」

たどえ事実でなくたっていい。真実でなくたっていい。

私のこの激しい想いたちが、空虚な妄想なんかじゃないことを確かなものにできれば、それでいい。

それさえ確かなら、たどえ過去が無くても世界が嘘でも、この衝動が私を私たらしめて、それは例えば、愛の正体が電気と化学反応の織り成すピタゴラスイッチだったとしても、その関係系の中に私は居る。

私の手を取ると、どこかに置いてきた後悔と焦燥と罪の記憶が私の中に帰ってくる。

私は乃木園子。

理不尽と共に

人は願ひ、神は願われる。

ならば神の願ひはどこへ向かうのだろうか？

神は理不尽だが、人は智慧に暗い上に身勝手だ。

神は望まれてそこに在るが、飽くまでそれは人が理不尽を調伏するための装置としてであつて、不自由な神自身への思慕など欠片も在りはしない。

神は不可能を可能とする天上の超越者として描かれている。

しかし同時に神はルールに厳格であり、理そのものであるが故にルールを逸脱するものを許さず、自らも理に固く拘束されている。神が神として在ればこそ、実現できないこともあるのだ。

ならば、その自縄自縛によつて叶わぬ神の望みは、変質したのち何に成るだろう？ 超越者であるが故に自ら以上の存在を見い出せず、何者にも頼ることの叶わぬ神の孤独は何によつて癒されるだろうか？ 想われず、満たされず、役割に縛られた存在にすべく人格を押し付けられた“神”という存在に私は憐れみを覚える。

その日、確かに一度神は死んだ。私が私で私を殺した。

しかし殺したと言っても別に大したことはしておらず、なにか特殊で特別な何かを行使したわけもなく、大それたことではあっても、私はただ私としてそこに存在していただけに過ぎない。

強大にして哀れなる神は、生半可に人格なぞを持っていたがために、私という存在への抵抗力を持たなかったのだ。理屈も何てことはなく、勇者や巫女達のような神秘的な力など持っていない私は、当たり前前に、実際に、現実的に、起こし得ることしかしていない。

では、神と人類の関係を「小説の登場人物と、その作者」というように例えてみよう。作者はキャラクターを創造し、著作内の人物を操ることができるが、まるで生きているような人物を描こうとすればこそ作者はそのキャラクターの設定、つまるところの定義に縛られ、次第にキャラクターの意思に沿うように勝手に筆が走り出し、そして書き上がってみると、読者のみならず、生みの親であるはずの筆者自身も主人公たちの行動に、言葉に、決意に胸を打たれている。

頭を覗き見、脳に直接イメージを送り込み、記憶を奪い、人の意思を捻じ曲げることが



できる神樹や中立神も同様で『見られている』とは、裏返せば『見ることができ』と  
いうことであり、彼らの認知の内に入れるのであれば、そこはもうマインドコントロール  
の射程内であり、神であれば私を完全に模倣し再現し得る。なれば、私の定義を明瞭に  
示して振る舞いを再現させればいい。

これは学習心理学の実践である。

判断によって行動が生まれ、行動によって学習にゆらぎ（差異・多様化）が生じ、学習  
によって無意識が組み上がり、無意識の上澄みに意識が揺蕩う。故に行動と心理（意識・  
無意識・精神）は学習を介して一つの円を成し、不可分な相互作用関係を持つ。

旧い言葉に倣えば「狂人の真似とて大路を走らば、即ち狂人なり。偽りても賢を学ばん  
を、賢といふべし」だ。偽りのつもりであっても、それは真となる。

私の姿を捉え続ける限り、人格神が私の影響範囲から逃れることはできない。

これを閃いたのは、神樹（私）が再現した私（神樹）だから、私（人間）の思考を讀ん  
でいても回避は不可能だったろう。ざまあみろ。

ここからはただの回想。もしくは消化試合。或いは思い出。まあ、もつとも、今を現在だと思っただけで、今見ているものが走馬灯ではないと証明することなど誰にもできはしないが。――

\*

四国は最早魔境と化した。

この光を失った世界で、位置の判らない方角から何かが迫ってくるような音がヴーンと遙か遠くへ小さくなったり、目の前をロケットが断続的に爆裂したかの如く動悸を呼ぶ音が激しく叩き鳴り打ち、正体への理解を拒む脳が距離も方位も形も大きさも見失い、インフルエンザの高熱に浮かされるように人間の精神を不定形に変える。

「間に合ええええっ!!」

闇に食われた星々の代わりに、若葉が空を緋色に焼き尽くしながら避難所へ飛び、火に誘われて立った蚊柱が若葉の目や皮膚や肺に固く鋭い爪を突き刺す。

数刻前までの地獄に思えた景色は悪夢に犯され、地を覆う漆黒の海から、臓物や肉片のようなブヨブヨとした質感のパーテックスとも異なる異形や、前脚代わりの細く鋭いクモの脚を胸から三本生やし、体のパーツをバラバラに拡大収縮させている一つ目の一本足の

鹿のような化け物や、自らの目玉を腹這いに潰しながら暴れまわる巨大な首の無いクジラの脚などが無数に這い上がり、ヒトの文明を溶解させてゆく。

「が、あ、あ、あ、あ、あ、あっ!!」

体内に侵入を試みる鞘翅たちを、血を吐きながら大天狗の火焰で焼き尽くす。

「なんなんだ！ 一体なんだと言うんだ!!」

これが全て楓さんの仕業だとでも言うのか!? くそっ!」

電信柱が狂った尺取虫のように身を振らせ、メチャクチャに頭を地に壁に打ちつけている。

工場も発電所も市役所も瓦礫に置き換わってしまった。

この事件が解決したとして復興には何年かかるだろう。人々の脳裏に焼き付いた恐怖を拭い去るには何十年かかるだろう。きつとすべてが元通りとはいかない。

避難所に着くと、巫女達によって張られた境界が不浄の存在たちの侵入を阻んでいた。

「びよびよびよびよん」「にゃにゃんないないない蛙っ!ここここここ」「走れえええええ! 止まれえええええ! あるけえええええ! みすと!」「サンタクロス!死ねえ!」「サンタクロスだ」「やませ」「ふっふふーたぬぎ」「かんちよーちようかんのきゅうかんちよう

のかんじぎのかんぬぎのヌース……」

それでも正気を失った世界につられて狂気が伝搬し、脱走を試みるものが後を絶たない。既に2〜3人が外に飛び出し、一斉に跳びかかった蛭のようなものに肉を溶かされ嘍り上げられていた。

「いやあああ！いやあああ！あひひひひひ！」「大人しくしろ、バカ！」「もう無理！これ以上は！」「新島さん後ろ！」「南無ー、あむあむまむ……死んでしまうとは……」

可能な限り死人を出すまいと余力を残していた人間達が、避難所の扉があった場所で背水の陣を敷き、偶にこうして決死の押し競饅頭に負けて境界から身体をはみ出させ、抵抗空しく食い殺されている。

「乃木若葉様……！」

一帯を焼き払った若葉が表に居た巫女の一人に話しかける。

「被害は?!」

「……死者9名以上、負傷者不明です！ごめんなさい！私たちのせいでこんな「謝罪は後でいい！救命に全力を注げ！」はい……！」

巫女に状況を聞いたところ、現在、カガミブネで順次大赦へ転送しているところだとい  
う。 静さんの話では月宮殿というところを拠点にしていたそうだが、中立神が消えたせ  
いか移動できなくなっているようだった。

「大赦……か…（くそ……視界が歪む……！ さっき咬まれたヒルが原因か……）  
皆さん、もう少しの辛抱です！ 気をしっかり持って！」

市民の転送先である大赦本庁へ視点を移す。

夏凜の暴走により幾つか破壊された箇所があり、その穴を埋めるべく防御にかかる巫女  
の数が高増しされている。 正確には防衛自体は余るほどの用意が大赦にはあったが、そ  
れに頼ることは憚られたため人手を割かざるを得なかった。

「——だから防衛は私たちに任せて、巫女さん達は市民搬送に専念した方が効率良いと  
思うんだけどなあ。 ほら、私は別に敵対しているつもりはないし、実際彼らを食い止め  
てるじゃん？」

「では何故カガミブネの移動範囲から月の宮を除外したんですか？ あの魔物たちは海か  
ら来ているようですし、今一番安全な場所はあるはずですよ」

「確かに私は中立神を吸収したから、あそこも私の支配領域ではあるけれど、あくまで私：神樹ベースだから壁の外は良く見えないんですよ。種を飛ばすか根が届くのを待つてもらおうしかない」

本来であれば、最大限の敬意をもって接する上里ひなたであつたが、ことここに至り、既に死人を出してしまつた今、たとえ相手が天上の存在だったとしても一歩も引くわけにはいかなかった。

「あなたは私たちの味方なんですよね？　ならせめて、中立神様の不滅の加護を使ってはいただけませんか…？」

「うーん、それはできないね。実行可能ではあるけど」

「何故ですか？」

「今加護をかけても仏教の地獄の再現になつてしまふからね。君たち以外の人類が何万人精神崩壊しようが私はどうでもいいし、それを後になつて気付いて後悔する上里さんはきつととも愛らしいだろうけど、承服はできないわ」

中立神の言葉に惑わされ、『生きてさえいれば何とかなる』と何処かで思わされていたひなたが口籠もる。

「……そう：かもしれないません：ですが、このままでは……」

「別に死ぬだけなら私が魂回収するし、死なせておけばよいのよ。

忘れてるかもしれないけど、元々この場所には魂を召喚してるだけだから『この場所での死』と『現実での死』はイコールじゃない。まあ黄泉の連中に食われて無事かどうかは知らんけど」

元の神樹や中立神であれば、こんな投げやりな判断は行わなかっただろう。

再現された人格が、人命に関わるような争いの経験も少ない神世紀の大多数の人々でもこうはならなかったはずで、これはヒトも虫も獣も雑草も命の価値を等しく見て、感じて、数多の命を自覚的に奪ってきた楓のパーソナリティ故の判断である。人を殺すように虫を殺してきた彼に『命は大事だ』などと説いたところで考えは変わらない。

「じゃあ樹海化で守るのは？　こんな方法で助けられても嬉しくないよ、楓さん：」

「…考えてみたけど、彼ら亡者はバーテックスと違って元は人間の魂だったりもするからちよっと危ないな：穢れが混ざると良くない」

風が胸ぐらを掴み、怒気をぶつける。

「わざと氏紙君を黄泉に送ったりしてたくせに今更そんなこと……！　屁理屈捏ねてないで

何とかしなさいよ！ 神様なんでしょ!？」

「だから何だ？ 仮にできたとして私が態々そうしてやる義理はねえよな？ 気に入らねえなら自力で何とかしろよガキが」「ガッ……!」「堪えてください風さん!」「この際、いっそ荒治療でいっぺん死んどくか?」「やめて楓さん!」「殺生を死を否定したまま生きていたいなんて言葉ほど命や生きることに対して不誠実な振る舞いはない——

——パチン。と小さく音が弾けて、心痛と悲愴を腫に滾らせた園子が見えた気がした。胸ぐらを掴む風の手を解き、素早く間に入った乃木園子が平手を打ち込んだのだ。数秒見つめ合ったのち、また彼女が何もかもを諦めたような笑顔を貼り付かせて言葉を差し伸べる。

「……ハハ……確かに私たちは神樹様がいないと何の力もない子供なんよ。

楓さんの言う通り、この世界で死んでも生き返るのかもしれないし、楓さんは神様で、言う通りにすれば全部上手く行くのかもしれない。

でも、普通は死んじゃったら、それっきりなんだよ……?



いっぱい、いっぱい苦しんで、やりたいことも楽しいことも全部できなくなっちゃるんだよ……？

大好きな人たちとも二度と会えないんだよ……？

誰かが死んじゃうのを怖がることは悪いことなの……？

誰かが苦しむのを止めたいって、助けたいって思うのはいけないことなの……？」

「（優先順位の話であって駄目だとは言っていない。）

取り返しのつくことのために、取り返しがつかなくなるかもしれない危険は冒すべきではないという話だ。 ……が）

…確かに、私の視点を押し付け過ぎていたかもしれない。 君たちに見えない部分につ

いて配慮すべきだった。 ……すまない」

神が人の子供に頭を垂れると、園子は安心したのか潤んだ目を細くする。

「ねえ、フーミン先輩……」別々に許す必要はありませんよ。私には関係ないことですし「もう！ 楓さん!?」……犬吠埼さんが何を思おうが、どんな感情を私に向けようが、私は無関係に救済のための最善を尽くすだけなので許すも許さないも気にしなくていいですよ??」

「……………つたくもう、人の謝罪のタイミングを潰すんじゃないわよっ…… 私にも謝らせなさい!」「知らんがな」「モー!」「そういえば三好さんが暴発したのって、多分亡者の仕業ですね。この騒動終わったんで謝るタイミング逃しましたけど」「何の話?」「そろそろまた私が死ぬっばいんで、予定通り、その前に皆さん元の時代にサヨナラバイバイ? みたいな」

世界が地響きを上げて大きく揺れ、勇者たちの身体が輝き始める。

「……………死ぬって、どういう……………え? どうして……! なんで……! 楓さん!」

「気にすんな。君たちにしてみれば、私は結局氏紙楓のような何かでしかない。計算機

が言動をトレースしてるだけだからな。無問題、問答無用にすべてが解決よ」

「待って! 待ってよ! 楓さん! 私まだ……!!」「ノンストップ待ったなし、死ぬもの」

「本当にこれで解決なんですか……?」「おふこーす」

「もうアタシにゃ、何がなにやら……」

「ユメもキボーも無い非情なりアルワールドに帰還だよ。心の準備はよろし? 神様に

お祈りは? オフトウンの中でもぞもぞする準備はおく?」

園子が何か言いたげにしていたが言わせる気はないし、聞く気もない。 サヨナラだ。

——魔王の腹から一振りの槍が突き出ている。

「…どうしてだろうなあ……」

己から生える凶刃を両手で握りしめ、死後に至ってもなお報われることのなかった氏紙楓の記憶が明滅する。

——天も地も水平線の先に至るまで全ての存在が闇に没し、槍に巻き付けるように飾り立てられた紅い連珠だけが宇宙に浮かぶ赤色巨星のように鈍く光を発している。揺られ擦れ合い、弾き合う度に、ギチギチ・コロコロ・という碁石同士を打ち合わすような音調が転がるが、それどころか遠くに吸い込まれてゆく。

「命を捨てて、人を辞めて、自己も失って、神を喰い殺し、万象を掌握し、これだけの代償を支払って、これだけのものを用意して……」

想定し得る限り最大最良のコンディションと、神という名の最上の道具と、膨大なエネルギーに神智を備え、資源の続く限り無限に生産される分身を持ち、これらを一拳同時に揃えるという偉業を成し遂げ、因果を操り、星の成り立ちに関わる力を自在とし、並行世界と異世界を観測し、不可逆な死の平等という宇宙の法則にさえ手を掛けるまでに至った。

それでも届かない。

たとえ宇宙のすべてを思い通りにできたとしても、彼が望んで動けば、その望みは必ず挫かれる。それは『この宇宙と彼が初めからそうなるよう作られている』とでも言うように宿命付けられている。魔王は討ち滅ぼされるために在り、砂の塊を握りしめては崩れて零れてしまふ。

「あーあ……！私にできる限りのことを出来ていたはずなのにな……？ でなければ神に手なんか届くわけがない……そうだろう？ なあ……？ どうして私はこうなるんだろうな」

隙だらけの魔王の背中を貫いた槍を引き抜くと、それは力無く空を仰いで斃れる。

「失われても構わない私だから選ばれて、在り方に拘らない私だからこそ私は私を失わずに在り続け、虐待され続けた経緯によってマインドコントロールの技術／知識を習得している、だから人格神を括り殺せた。

元々の私の役割は、依り代の制作と黄泉への動機だけだった。だから。他の誰でもない私だったからこそ神の首に手が届いた。神が依り代を生む過程で生じたのが私でなければ神を捉えることはなかったはずで、だけど、私でさえなければこうして挫かれることもなかったはずだ」

暗黒の海から現れた黒衣の少女は、槍を逆手に持ち直して心臓を貫き、魔王を地面に磔にする。

「まあいいか……この槍がここにあるってことは、そっちは上手く行ったってことなんだろう？ 棗」

「私は詳しいことは何も知らない……その槍が何なのかも……私はただ、海の導きに従って潜っていただけだ……」

黒衣の少女がボソリと呟き、魔王は自らの喪失を感じながら独り言を零す。

「……別にさ。どうでもよかったのよ……何もかも。私は私が救えないことも報われないことも幸せになれないことも解っていたし、私が死のうが生きようが忘れられようが、それで私が犠牲になったとは思わない。」

万物万象は根源的に虚無なのだから、すべては定義しなければ価値も意味も意義も無く喪失もない。失望していれば、期待せず絶望もしない。私はただ私としてこう在る以外の何も無い。だから私が生きている必要はないし、私がこの私である必要も全くない。私は掛け替えない誰かではなくて、私は私であると同時に何処かの誰かで構わない」

楓の残滓は、絶望的な自己を詭弁でもって実態亡き者とする。

それは自らで自らを洗脳し、暗示し、扇動し、誘導することで生きていたところと何一つ変わらない有様で、きつと彼らは長く絶望に浸り過ぎていて、自分が絶望していることにも気付けないほどに嘘と錯誤にまみれていて、とても救い難い。

自身に騙され、洗脳され、偽りが真心へと裏返ってしまっているのだから、とうの昔に氏紙楓の本心などというものは定義不能なまでに喪われており、言うなれば楓は生きていたところから死人（しびと）であった。痛みを感じない死体は自らの傷に気付けない。

「一体、何をするつもりだったんだ…？」

「……さあねえ。私の中の神たちが自己を取り戻し始めた今になって言えば、ただ『黄泉へ向かう』という意志の残滓がそうさせていただけなのかもしれないし、私を構成する神の誰かが黄泉の国に対して特別強い執着を持っていただけかもしれない」

世界がキラキラと輝き始める。

「これは…」

「……………」

「少し納まりは悪いかもしれないけど、この世界はここで店仕舞い…………」

「終わってしまうのか…？ こんな唐突に… 楓はこれでよかったのか…？」

棗が膝をついて、無残に胸を穿たれた魔王に手を回し身を起こそうとするが、深く固く縫い留められたそれはピクリともしない。

「もう私は氏紙楓ではなくなる。

だから私がこの私であるうちに終わらせる必要があるのよ、棗さん。

…棗さんは美人だね。見惚れてしまうぜ」

棗の頬から首の辺りを指の背で撫でて、『勇者たちに手を差し伸べられ見つけられたならば、照れて見せるか口説き文句を垂れる。もしくは両方』と予めプログラムされていた様な単調な言葉が出力される。たとえ文脈を無視した場違いな台詞であろうとも、最早壊れたマリオネットは元のように踊れない。

「…もう眠れ」

魔王の身体が崩れるのを合図に、地面も海も空も建物も砕けて光に還元され消えてゆく。黒の世界が白に相転移を始める……………

(風たちに別れを言いそびれてしまったな……………)

…だが、別れとはいつも突然に訪れるもの……………私に迷いはない……………)

「ああ、何も不安に思うことはない。私には私がついている」

棗が声に驚いて目を開けると、一瞬、光の海に沈む魔王が自分の姿に変わって消えた。

目の前には槍も、槍を握りしめて何かを行っていたらしい少女の姿も消えている。

「まだ：終わっていないのか？」

勇者たちは目の前が真っ白になり、各々の時代へ帰還する。

報いはあっても決して救われることのない、取り返しのつかなかった現実へ――

\* \* \*



（うたのんが死んだ。うたのんが死んだ。うたのんが死んだ。うたのんが死んだ。うたのんが死んだ。うたのんが死んだ……）

白鳥歌野が死んだ。

「ううっ！ヒツグ、うだのん……！うたのんっ……！」

諏訪を護る御柱結界は破られ、飛来する化け物たちに、人々は為す術なく平らげられる。苦し紛れに農具を振り回す者、床下に隠れる者、逃げ惑う姿は様々で、ただ一点、化け物に殺されるという結論だけが変わらなかつた。

中には死を悟り、自らの大切なものを少しでも延命させるべく、勇者のように覚悟をもって敵に立ち向かう者もいた。なれど美しい死に様など望むべくもなく、死は平等公平に惨たらしく人類の命を摘んでゆく。悪人も善人も大人も子供も例外はない。

「どうして、こんな……！ 酷い……！ 酷いよ……！」

歌野の身体はバラバラに引き千切られて、無造作に空から村々に投げ捨てられた。

最期まで共にいた水都の腕の中では、毛髪のお陰で辛うじて人の頭部であると判る潰れた肉塊が巫女服を赤く染めている。

貴人も麗人も、こうなってしまうえば等しくグロテスクな肉と糞でしかない。

巫女は後悔した。

やはり歌野だけでも四国に逃がしていれば良かった。

こんなことなら、醜く泣きわめいて軽蔑されてでも無理にでも追い縋って『一緒に逃げ  
て』と言えばよかった。

すべては後の祭り。過ぎてしまったこと。終わってしまったこと。

泣いても叫んでも歌野は戻らない。時は戻らない。

「ハッ…ハッ…！ ヴゥヴッ…！」

自分は何もできないから。

歌野が私の生を望んでくれたから。

水都は村を捨て一人で森を走り続ける。

たとえそれが自身を最も苦しめる道だとしても、生き地獄だとしても、だからこそ、そ  
の道を水都は選ぶ。 自殺する勇氣もなく、むぎむぎ歌野の想いを無下にして殺されるこ

とは到底許されず、しかし無理な戦いに歌野を送り出してしまった罪への罰が無ければと  
ても生きてはいられない。

いっそ殺してほしいと願っているのに、パーテックスを感知する巫女の力が、水都を残

酷なまでに生かしている。

「どうして…！ どうして…っ！」

星屑の殆どは村に集中しており、単独で逃げる水都のことを放置している。

もしかすると逃げきれてしまいそうな事実が水都をより苦しめた。

「私はうたのんの巫女なのに！ うたのんを守らなきゃいけなかったのに…！ 自分が生き残るために皆を見捨てた酷い人間なのに！ どうして私を生かすの…！ 敵も神様だっていうなら、どうして私を罰してくれないの…!?!」

水都は心身ともに疲れ果て、木の根元に腰を下ろす。

「ねえ、うたのん…私ね… 私…」

持ち出した歌野の頭部は骨が砕けていて、持ち上げたり膝に置く度に、ぶよぶよと形を変形させる。眼孔から零れた目玉はもう何処にも焦点を合わせていない。脅威から離れた今、それを静かに眺めていると只々涙が溢れてくる。涙と過呼吸で手が痺れて、歯が合わない。

気高く、優しく、美しかった歌野の瞳が今は気味の悪いものに見えてしまう自分が許せなくて、今すぐ自分の顔も体も刃物でグチャグチャにしたい衝動に駆られる。『ああ、もう

自分を見てはくれないんだな。言葉を交わし、笑顔を向けてはくれないんだな……』と失われた取り返しのつかない日々を突き付けられて、頭が如何にかなってしまっそうになる。

「私……まだ生きてなきゃ、ダメなのかな……っ。」

うたのんの居ない世界で、ずっと怯えて、生きていかなきゃいけない……」

太陽が沈むと森の中に身を潜めていた常闇たちが遥か巨大な触腕を伸ばし、霧を連れ合っ水都の命を食らい始める。

(ここは暗くて……寒くて……とても寂しい…… フワフワした優しい場所……)

もう動けないや…… ごめんね…… うたのん……)

凍てつく闇に吞まれて消える。

光が陰る。

灯火が消える。

「こんどは……間違えない……か……ら…… …… …… )

勇者・白鳥歌野 無数の星屑と進化型バーテックスに囲まれ、戦死。  
巫女・藤森水都 山中にて人知れず凍死。  
諏訪地方の村民 全滅。

\*

——！ 千景、どういうつもりだ!?

ねえ、乃木さん……不条理だと、思わないかしら……？

あなたは、みんなから愛されて……私は疎まれ、嫌われ……

どうして、こんなことになるのかしら……？

——お前が……お前さえいなければ……!! 私可愛されていたのに……!!

私は……どうすればよかったのだ……？

千景との間には、最初は確執があつたかもしれない。

しかし最近では打ち解けて、仲間として心を通わせていたはずだった。

なぜ……こんなことに……

——千景、私の傍を離れるな!

どうして……？ どうして、私を……守るの……？

私は……どうしてこんなふうには、できなかつたんだらう……

——千景、すぐ、病院に……!!

無駄、よ……今、生きているのだから、奇跡みたいなの……もの……

——そんなことを言うな!

……バカね……私は…… 本当は何もなくてなんか、いなかったのに……

……乃木さん……私は……あなたのことが嫌いよ…… でも……

……

最期に、あなたと同じ場所で同じ風景を見ることができて、よかった——







千景たちは何処までも続く闇の中にいた。

そこは視界を遮る一切の遮蔽物は無く、光源も無いのに自分たちの姿はハッキリと視認できる奇怪な場所だった。

「場所……というよりは空間……？　ここが死後の世界？」

説明を求めて杏に目配せをする。

「実は神樹様に関わっていること以外、私たちもよく知らなくて……でも、こうしてまた千景さんとも話せるようになって嬉しいです……！」

千景の隣に座った杏が目じりから涙を零し、薄幸の美少女然とした煌めくような微笑みを返す。

「……その………　ありがとう……」

杏は勇者たちの中では千景と比較的良好な関係を築けていたが、千景は非常に奥手で、これまで友人と呼べる者もなく、自分と再会できたことをこの様に感激してもらえると夢にも思っただけでなかった。

（私は……親にも、世間にも、疎まれ嫌われ嗤われて……見知らぬ人間からさえも剥き出しの悪意をぶつけられるような酷い生涯だった……不幸ばかりの人生だったと思う……）

千景の身体に熱いものが流れ込み、瞳から溢れ出す。

(でも高嶋さんに巡り合えて… 私の死をこんなにも惜しんでくれる仲間ができて… 最期は乃木さんと同じ目線に立つこともできた……)

幸せは、一瞬だったかもしれない…… それでも… それでも……！……)

「みんなと逢えて、私は幸せだったわ……」

伊予島さんも土居さんも会えてよかった…… 私を愛してくれて、ありがとう……っ！」

「ダブもちがげをあいじでるぞおおおつちがげえええつ!!」

「……相変わらず騒がしいのね、土居さん」

そう泣き喚く球子の頭を撫でてみると、迷子猫の搜索に駆り出されたある日のことを思い出して『やっぱり似ているな』と？千景は臍に落ちた。視線を戻すと、杏がほんのり

頬を桃色に染めて目を泳がせている。

「……私も……良いですか？ ……ハグ……」

既に球子が無遠慮にしがみついているのだから、気にせず便乗してしまえば良いのに、

もじもじと抱擁の許可を求める姿が愛らしくておかしくて、千景はクスリと微笑んで杏を抱き寄せた。

「はわわっ……！ ……こんな積極的な千景さん初めてかも……暖かい……」

「そうね……死んで恥も外聞も気にしなくていいからかしら……？ 今更仲間の前で気にしてもって思ってしまう」

「千景さん頭撫でるの上手ですね……なんだかドキドキしちゃいます……」

「おおい、ちょっと懐き過ぎなんじゃマイカ？ あんずく？」

「なんだか今の千景さんからは、長期休み期間中にお祖母ちゃん家や親戚の家に預けられた小学生が現代的な遊びから隔離された田舎で体力を持て余していたところにフラッと現れる優しくて面倒見の良いその期間にだけ会える憧れのお姉さんみたいなオーラが出てなんだか、なんだか、すっごくイイのっ！」

「お、おうっ……ソーダナ……」

「伊予島さんも変わらないわね……」

そんなに前のことでもないはずなのに、なんだか懐かしいわ……」

切り札の影響で荒んでいた千景の心に穏やかな時間が流れる中、それを遠目に見守る光

が二つ、三つ、五つ……

(…ほれファイトや、みと番チヨ… 絶好のタイミングやで…?)

(…寝起きドツキリのプラカードなんて、どうやって用意したんですか静さん…)

(…うう、よかった…! よかった、ねえ…っ 早く混ざりたいだろうけど今は我慢する

のよ、花本ちゃん…っ!」

「…何を言ってるんですか恐れ多い… 早く混ざりたいのは安芸先輩の方でしょう?」

「だってだって、あるとき死んじゃった球子と杏ちゃんが目の前にいるのよ…!? 自分だ

って、さつきからずつと泣いてるくせにい…!」「っ、それは…!」「あの、もう少し静か

に…」「えっ、えっ。なに、みどりん、今ウーチーのーこと?」「呼んでませんし、無理

やり持ちネタを捻じ込まないでください…!」

まだかまだかと焦らされ、てんやわんやしていると巫女達が背後に現れた多数の気配を

察知し振り返る。

「…ひなたさん…どうでした?」

上里ひなたが静かに首を振る。

「若葉ちゃんも、友奈さんも、見つけることはできませんでした… まだこちらにいらし

ていないだけだといいんですが……」

「大丈夫、大丈夫。これが神樹様のお導きなんだから悪いようにはならないって」

今ではひなたの方が年上になってしまった、かつての先輩たちが言葉をや柔和に砕く。

「そうそう、案外ふらつと烏丸先生が連れてきたりしてね」

「巫女じゃないのに？」「巫女じゃないのに」

「…あの人は、そもそもここに呼ばれないと思いますが……もし遭遇していたら適当な理由付けて同行してそうではありますね……」

「(今度は乃木さんまで巻き込んで、ゆうちゃんを連れまわしてるとか……?) 大人しく成仏してほしい……」

「まあ、魂焼かれて消滅したはずの私たちでさえここに居るんだから、きつとどこかで寄り道してるんだよ」

「大和田さんの言う通り！ それに探す時間はいくらでもあるからね」

暗い穴の中に真っ直ぐ落ちていくような感覚がして、気が付くと一人きり闇の中。

現実には干渉できない代わりに過去へ未来へ時を渡ることのできるこの場所には「今」という概念が存在しないようで、先に死んだ人が、何十年先の時代の人の後からやってくることもあるし、一緒に死んだはずの二人が何年も後に再会することもある。……と言っても、日の昇らないこの世界で何処から何処までが一日といえるのか分からないけれど。

「心配いりませんよ。ね？ひなたお姉様♪」

自分のために命を燃やしてくれた最年少の巫女が、以前と変わらぬ笑顔を自分に向けている。

「(あの場では覚悟していても、天の神に焼かれていたときにはきつと名乗り出たことを後悔したはずなのに……恨むどころか今もこうして慕ってくれている……)」

……そうですね、巽さん。 答えの出ない心配よりも、今はこの幸福を素直に受け取るべきでした。

行きましょう。皆さんを迎えに」——

この場所には敵もいなければ、神樹の神託も届かない。

ここにあるのは杳然と広がる無関心な闇と、心に差し込む一筋の淋しさだけ。

他には何もない。

人は一人で成し得ないことのために他者を求め、他人より多くのものを得ようと争い、力を誇示し、格を付け、レッテルを貼り、場合によっては身近な他者のすべてを奪い、亡き者としてしまう。それもこれもヒトという種が交配によって殖える生物故に、他者性を本能的に求めるよう『淋しさ』を遺伝子に刻まれているからだ。

そしてその淋しさは死後も残り、その淋しさ故に現世に立ち返ろうとする。

破壊によらず魂にも終わりがあるのだとしたら、きっとそれは淋しさという名の執着を克服したときなのだろう。

例え愛しい仲間たちと無限永久に共に居られたとしても、自分たちを知覚する以外にできることのないこの闇の中では、未知の刺激も無ければ、未来と呼べる発展性もなく、先には絶望的な退屈と倦怠感から生まれる取り返しのつかない必然的不和しかない。関係が割かれた後には傷ついた心と後悔と孤独のみ。

そうして、地獄にも等しいこの輪廻は紡がれる。

この場所は我々に無関心なだけで Heaven じゃ Valhalla じゃ Elysion じゃありはしない。



さあ、起こったことは変えられなくとも、死が終わりでないなら心くらは救えるはずだ。だから私たちは会いに行こう。